trapezoid ~時空を架けて~

莉杏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｔｒａｐｅｚｏｉｄ　～ 時空を架けて～

【Ｎコード】
Ｎ９０８２Ｘ

【作者名】
莉杏

【あらすじ】
いたってふつうの高校２年生「玲南」は、毎日、担任である数学教師「優紀」とお昼ごはんを共にする。
そこには、それぞれ玲南と優紀が抱える問題があった。
周りからは見えない、人間の抱える闇や葛藤。
そして２人は、現実とは隔離された空間へ引きずり込まれてしまう。
そこで出会った仲間とともに、自分の闇を光に変えることができるのか。　リアル×ファンタジー　完全オリジナル作始まる！

あの人との出会い（前書き）

つたない文章ですが、読んでくださったら嬉しいです☆

あの人との出会い

ｔｒａｐｅｚｏｉｄ：　不等辺四角形・またの名を台形という。

あたしたちの住む世界は、狭い。

「ねぇ、レナ。知ってる？」

「何を？」

「俺らの生きてる世界って、ほんとはすっげぇちっちゃいんだよ」

あたし、唐沢玲南（カラサワ レナ）。　関東のちょっと田舎（？）に住んでる高校2年生。

両親と妹、弟とふつーに暮らしてます（笑）

親友の芽衣からは「玲南はＡ型に見えるッ！」って言われてるけど、Ｂ型です（（＋＿＋））

キーンコーンカーンコーン…

やっと４時間目終わった…。　教室は一気にざわめき始める。

机をガタガタ移動させ、「いつめん」で集まって各々お弁当を広げる。

「焼きそばパンゲットーーー！！！」と騒ぐ男子。

いつもと何ら変わらない。

そしてあたしは、席をたった。

両側に並ぶ教室のにぎやかな声を聞きながら、廊下を歩く。

第二校舎の１Ｆすみっこ。第一多目的室があたしの居場所なんだ。

ドアを開けると、、、いた。

身長１５８センチのあたしよりちょっと高い目線。黒くてつやの

ある髪。グレーのシャツに、青いチェックのネクタイ。
「よぉ　レナ。」
右手のお弁当箱の包みを少し持ち上げて、彼は言った。
彼はこの学校の数学教師。と、言うとそこらのケータイ小説のようだが、あたしはこの人に恋愛感情を注ぐ気はさらさらない。　だいいち、若干２５歳の彼には、寄ってくる女子が山ほどいるわけで、彼は恋人候補に苦労しないってわけである。
「今日は、晴れたな。」　机でお弁当をひろげる先生。
「うん、そうだね。　…昨日の雨、すごかったもんね。」　向かいに座るあたし。
「レナ、チャリでコケなかったぁ？」　卵焼きをかじる先生。
「コケないよっ！　芽衣じゃあるまいし！」　反論するあたし。
「あぁ、早瀬は派手にやってたな～」　お茶のペットボトルに手を伸ばす。首から下げたネームホルダーが揺れた。　…高搭優紀（タカトウ ユウキ）
今のあたしの担任。

「…食べる？」　先生がからあげを目線の高さまで上げる。
「…ううん、いい。」　いつもと同じやりとり。　何ら変わらない。

これが、あたしの教室でお昼を食べない理由。
食べない、んじゃなくて、食べられない。

「そっか。　…美味いのになぁ～。」　からあげをほおばる先生。
あたしは、窓の外に目をやる。　テニスコートの奥の林が、色づき始めていた。
彼と昼を一緒に過ごすようになって、早いもので1年半が過ぎようとしている。

先生との出会いは、あたしが高１の頃。
お昼休み、クラスに居場所がないあたしは、毎日４時間目が終わると校舎の影にある中庭のコンクリートに座って、アイポッドで音楽を聴いていた。
めったに人は通らない。　だからアイポッドを使っていても気付かれる心配がないのだ。
ただ、寂しいだけ。
お昼休みが終わるころ、芽衣が迎えにくる。

あの日も、いつものように音楽を聴いてたんだ。

「…っッ！？」
突然、誰かにヘッドホンを取られ、振り返った。
「あ～　いけないんだ～」　そこに、彼がいた。
「あ、あの、、、」　校則違反がバレたと思い、とっさに手を伸ばすも、後の祭り。
「１年４組　唐沢玲南さん？こんなとこで何たそがれてるのかなぁ？」
不敵な笑みを浮かべる先生。
「なんで、あたしの名前…？」
「唐沢さん、うちのクラスの矢島の友達でしょ。　何度か見かけてたし。」
あぁ、そうだった。　同じ中学の　矢島実緒（やじま　みお）は家の方向も一緒で、２人で帰ることもしばしばだ。　でも、先生はあたしのことなんて知らないと思ってた。

「お弁当は？　昨日も食べてないみたいだったけど。」
「昨日も？」

「あ、昨日っていうか、先週くらいからずっと？」
「見てたってこと？」
「いや、だって俺の弁当食べるとこから丸見えですから。」
「はあ、、、。」

知らなかった。

「もしかして、いじめ…とか、、、？」　おずおずと聞いてくる先生。
「違うよ！」
「…ほんとに？」
「うん。ほんとだってば！友達もいるし。」　笑うあたし。
まぁ、そう思われても仕方ないか。

「ま、なんかあったら、相談のるし」アイポッドをよこし、渡り廊下を戻っていこうとする。

「取り上げないの？」
「なんか、さびしそーだったから。」　笑いを残し、ドアの向こうに消えた。

それからちょくちょく、先生は昼休みに会いにくるようになった。

そして、このころからだ。
あたしが夜、おかしな夢を見るようになったのは。

ここはどこ？

眠りにおちる、ちょっと前。あたしは思い出すんだ。
「今日も、世界の一部でいられました。」

「最近ねぇ～、変な夢見るんだよね。」
いつもと同じ第二多目的室にて。　今日の先生の昼食はコンビニのパン。
「へぇ～。毎日？」
パンを開けながら先生は聞く。
「ううん、なんかね、たまーになんだけど。すっごいリアルなの！」

「それってどんな夢？」
…ほら、パンくずこぼしてるよ！
「う～ん…なんだろ、現実そのものって感じ？」
「ふーん。。」

夢ってわからないくらいに、リアルで、鮮明。
そしてなぜかあたしは１４歳ってことになっている。
３年前だから今とそんなに変わらなくて、身長が少し低くなったくらい。
でも、意識がはっきりしてて、自分の意思で動ける。
場所は、、、よくわからない。
なんだか、懐かしくて少し怖いとこ、、、。
「その夢に玲南以外の人って出てくんの？」

…あと6分で休み時間が終わる。

「うん。いっつも同じ子。」

「子？」

「17歳なの。シグマって名前の男の子。」

「シグマ？それ、名前？　玲南、シグマって何か知ってる？」

「え？　知らないよ。　だってその子が言うんだもん。」

先生の目つきが心なしか哀しそうに見えるのはなぜ？

「シグマは、数学記号。　総和を意味するんだ。まだ習ってないよね。」

「さっすが、数学教師！」　あたしは笑って見せる。

「まあね。…さ、授業だ。玲南。」　先生も笑ってみせる。

台形の夢の中

また、夢をみた。

「シグマ、ねぇ！　シグマったら！」

あたしは走る。

夕方のどこかの狭い路地。　息が上がる。

「遅い。ちゃんとついて来ないと道に迷うぞ。」　シグマが言う。

身長は１７０センチくらい？

黒い髪に、少女を思わせるくらい長いまつげ。

グレーのプリントＴシャツにジーンズ、スニーカー。

特別美少年というわけではないが、なかなか可愛らしい顔立ちをしている少年、シグマ。

「だって…どこ、行くの？」

息も切れ切れのあたし。　なぁんで、夢のなかでこんな疲れてんの、、、？

「俺たちの仲間がいる場所だ。」

「仲間。　時の迷い人ってことかな。」　ふっ、と笑みを見せた。

…この横顔を、玲南はなんだか懐かしく思った。

「！　お姉ちゃん！　いい加減起きてよっ！」

バサッと何かが落ちてきた。

大量のぬいぐるみと枕。
しかめっつらであたしを見下ろしているのは、妹の春南(はるな)だ。
「もう！　お母さん仕事に行っちゃったよ！　あたしも朝練あるから！」
春南は中学1年生。
吹奏楽部に入ったとやらで忙しいらしい。
「もうちょっと寝かせてくれたっていいじゃん泣」
「だーめ！　朝ごはんは食パンだって。あっ！　もう行かなきゃぁ～！」
「いってら～」
いつもの朝。
あっ！　あたしも時間やばっ！
昨夜の夢が、もやもやと頭をかすめた。

その日、急に職員会議があるとかで、あたしは久しぶりに昼休みを中庭で過ごした。
芽衣はいっしょにいようって言ってくれたけど、あたしはそれを断って、中庭にいた。
でもそれはすぐに間違いだったと気付いた。
中庭は校舎の間の風が吹きさらしていて、とてもじゃないけど25分間も耐えられなかった。

教室に戻ると、芽衣たちはトイレに行ったのか、教室は思ったより人がいない。
ただ、いつも実緒たちのグループにいる葵という女子がいた。
あたしは、この子が苦手。
小柄で色が白く、おとなしい。
でもいつもグループから外されることがない。　男子にも人気が

あるようだ。
あたしとは大違いで、とにかく、うらやましかった。

放課後、あたしは図書室にいた。
プレハブ校舎のせいで、やけに湿気がすごい。
でも、暇をつぶすにはもってこいだ。
あたしは、帰りのスクールバスを待つ間にたびたびここに通っていた。
時計が４時３０分を指した。
荷物を取りに、２階のいちばん奥、２年９組に向かう。

夕日が差し込む教室。
ドアを開けようとして、ハッとして手を止めた。
教室には人がいた。
窓に重心をかけて寄りかかり、外をぼんやり見つめる人影。

・・・先生だ。

微動だにしない。
あたしは、動けなかった。
外を見つめる先生の目が、あまりにも哀しげだったから。

結局、あたしはまた図書室に逆戻りするほかなかった。

その夜、また夢を見た。

路地裏の小さな建物。　中はカーテンのような布が何枚も下がって、壁のようになっている。

シグマがそのうちの1枚を持ち上げ、中に入った。
あたしも後につづく。

なかには、6畳ほどのスペース。
そして、床に座ったまま玲南を見つめる4人の姿があった。

夢じゃなかったっけ？

玲南は、ふと、我に返った。
「…これ、夢だよね？」
わけがわからない。　こんな精巧な夢、見たことない。

「違うよ。」　シグマが言う。
「だって、、、えぇ！？」　シグマとほかの４人もこういう人の姿は見飽きているらしい。
「玲南、よく聞いて。」
シグマがこっちをまっすぐに見る。
透き通った茶色の瞳。
「ってか、そもそもなんであたしの名前っ…」
「落ち着いて。　おれたちはみんな同じだ。」
「？？？」
「閉じ込められてるんだ。」

シグマは真剣だった。

「夢だよ！　すぐに覚めるし！」　反論するあたし。

「無理だよ。　俺たちはここから出るためにいろいろ試した。何回も何回も。　でも、すべてダメなんだ。ここは、現実とは違う。」
シグマが言う。

「嫌！　やだやだやだ！　ここはバーチャルってこと？　そんなのありえない！」

「ありえるんだよ！　現に、俺だって信じられないんだ！　まさか、夢にとりこまれるなんて、、、。」
シグマは口を閉ざした。
そこではじめて、あたしは周りを見回した。
ちゃぶ台のようなテーブルを囲むように座っている４人。
ぱっと見た感じは、ふつうの人みたい。
あ、でも左から２番目の女の子は見たことあるような…？
「とりあえず、自己紹介だ。」　シグマは冷静だ。
「誰からやる？」　シグマの隣の少年が尋ねる。
「やっぱシグマからでしょ。」　見たことある少女が笑って言う。
「仕方ない…。　俺はシグマ。１７歳…ってことになってる。よろしく。」
無愛想ながらの自己紹介。
「私はミル。　１５歳。好きな食べ物はチョコレート！　よろしくねっ！」
ガーリーな感じの格好で、栗色の巻き髪がかわいい。
「…コトリ。」
１番小さい女の子。　少女にそっくりの人形を抱えている。
「ほらコト。　もっとしゃべれ。　いくつ？」
隣の少年がコトリの頭を撫でる。

「…　…。　４さい。　このこ、あかり。」
人形をの服をいじりながらそれだけ言った。
「はーい！　次は俺！　アイト、１７歳。好きなスポーツはバスケ！よろしくなっ☆」
人なつっこい明るい笑顔。　いかにもクラスの人気者って感じだ。
「はい！次は君の番だよ！」
アイトがあたしの肩をたたく。
「、、、唐沢　玲南です。１６歳です。　よくここは夢で見てて…。あの、まだよくわかんないけど、よろしくお願いします、、、。」
ぱちぱちと小さい拍手が起きる。
「玲南。今の自己紹介でわかったと思うけど、ここでは名字とか、本名は使えない。禁止されてるんだ。」シグマが言う。
「今から、玲南に名前をつける。」
「どうやって…？」
「ミル。　玲南に名前をつけられる？」
驚くミル。
「わ、私、、、？」
「そうだ。　女同士だし、玲南もそのほうがいいだろう。」

「わかった。　ええと、、、。」
ミルはあたしをじぃっと見つめた。
あたしも、ミルを見つめた。　やっぱりどっかで見たことあるんだよね…。

「決めた！」
ミルが言う。

「ララ。　同じＲの音が入ってるし、ほらそのストラップ、、、！」
あたしは、そのとき初めて自分の格好を見た。
紺のパフスリーブのトップス。細かいドットが散っているキュロットにトレンカ。
日本の一般の女子高生が好むスタイル。

そしてなぜかキュロットのベルト部分に、「あの」ストラップがついていた。

２週間前、先生がくれたストラップ。。。
小型のクレーンゲームでたくさん落ちてくるようなものだが、あたしは嬉しかったんだ。
ゴム製の樹脂で作られたカップケーキのフェイク。
先生は言った。

「玲南が昼飯をちゃんと食べられますように。」

フェイクの側面には「ｌａｌａ　ｓｗｅｅｔ」とロゴが入っていた。

「どう？　ララ。」

ミルが不安そうに聞く。

「いいじゃんララ！　可愛いよ！」
アイトがはしゃぐ。

「どうだ？」　とシグマ。

「うん！　嬉しい！　ありがとう。ミル。このストラップ、大事な人からもらったものなの。」

…一瞬、シグマが驚きの目でこっちを見た気がした。

「あたしたち」の場所

シグマ・ミル・アイト・コトリ。…そしてあたし、ララ。
みんなかなり日本人離れした名前だけど、どうやらここは日本らしい。
タイムスリップというわりには、時代どころか日付も現実と変わっていない。
つまり…？

「ねぇ、あたしたちって瞬間移動してるってこと？」

「いや？　そんなことはないはずだよ？」　アイトが言う。

「ここは、日本の地図には存在しない場所なんだ。”トラペゾイド”。それがこの世界の名前なんだ。ここには、何らかの理由で集められた人々が暮らしてる。俺たちみたいにね。」

「とらぺ…？？？」

「トラペゾイド。不等辺四角形のことだよ。」

「？？？」

「ほら、この家の前の坂をずーっと上っていくと丘があるだろ。そこから見えるこの街がでっかい台形の形してるからなんだってさ。」

手に持ったお盆をテーブルに置く。

「へぇ～。　アイトたちは、もうここにきて長いの？」

「んー。俺はここの家の中では一番最後に来たからなぁ。初めてこの夢を見てから2年は経つかな。」

「じゃあ、ほかのみんなはもうずっとここに閉じ込められてるんだね…。」

「ララ、なんか勘違いしてるかも。」

「えっ」

「俺たちは閉じ込められてるんじゃなくて、ここに来てるんだよ。」

こんどは、5つのコップにオレンジジュースを注ぐ。

「えっ？　でも…」

「シグマはあんな風に言うけど、俺は閉じ込められたとは思ってないぜ。あ、ララもオレンジで良かった？って、もう遅いけど（笑）」

「うん。　来てるって、帰れるってこと？」

「帰れるよ。ただし、自分の意思じゃ無理だけどな。まぁ、ララもそのうちこの世界のシステムがわかってくるよ。　お～い！　ミル、コトリ～！」

「そうかなあ…」

アイトに呼ばれ、表からミルとコトリが入ってきた。

手にもった袋にはドーナツが入っている。

「見てみてララ！　隣のユキさんからもらっちゃった！」
ミルが袋のドーナツを1つ差し出した。

「あ、ありがとう…。ユキさんって？」

「あぁ、ここの隣に住んでるおばあちゃんだよ。いっつも私たちに良くしてくれるの。あれ、シグマは？」

「あ～シグマっちなら中央タウンに…あ、帰ってきた。」
アイトは早くもドーナツにぱくついている。

「シグマもどーぞっ！」
ミルがドーナツをシグマに渡す。

「コトリもぉ～！」　甘えた顔でミルの足にしがみつくコトリ。

「コトちゃんにもあげるね。」

「おいおい、そんな顔しなくてもドーナツはなくなんないよ（笑）」
アイトがコトリを抱き上げながらなだめる。
コトリは座っているあたしをアイトの肩越しに見つめ、
「ララ！　アイトはコトのものだからねっ！」と、なぜか勝ち誇った顔で言われたw

そんなやりとりが、なんだか心地よかった。
今日初めてみんなと会ったのに、なんだか昔から知っているみたい。

「あれ、今日は長いな。」　シグマがふと、つぶやいた。

「そうだね。最近じゃ珍しいな。」ミルも言う。

「何が！？　何が珍しいの？」　あたしは混乱するばかりだ。

「あ～そっか。ララもわかってくると思うけど…」のんきに笑うアイト。

「コトがせつめーする！　あのねぇ、コトたちも、ララもねぇ、元の場所にもどるの！」

さっきまでの人見知りは嘘のように、コトリは無邪気に笑う。

…元の場所にもどる？

「ララ、俺たちは自分の意思でここへ来たり、帰ることはできない。」シグマが真剣になって言う。

「私たちは、現実とここを行き来してるの。驚いちゃうよねっ」

「そうそ、煙みたいにシューンってな」　ミルとアイトはお気楽だ。

現実と？　　やっぱり夢ではないことを再確認した。

また、ここへ来れるの…？

あたしは質問を重ねようとしたけど、やめた。

あたしたちの周り、そこらじゅうに白い煙のようなものが出てきたからだ。

「ほーら来た。　…またな。」　アイトが煙で見えなくなっていく。

「またね、みんな〜」　ミルが手をふってぴょんぴょん跳ねる。

「ララ、まいごになるなよ。」　人形を抱きかかえ、コトリが消える。

最後に、無言でシグマが消えた。

一時帰宅

気がついた時には、なんてことないふつうの朝だった。
なんだか長い夢を見ていたみたい。。。

起き上がろうとして、ハッとした。
…枕元に無造作に置かれたドーナツ。
あーあ、シーツに油が…。　しかも、ちょっとつぶれてるし…。
光希（みつき）の仕業だな…。
怒り半分で弟の部屋へ乗り込む。

「ちょっと光希！　これなんのイタズラ?！」

「は?　しらねーよ！　姉ちゃんがねぼけてんだろ！」

光希はホントに知らないらしい。
そもそも、朝から姉の枕元にドーナツを置く理由もない。
もちろん、家族の誰も知らないようだった。
もしかしてあたし、夢遊病?

ほんとうは、うすうす気づいていた。

昨日の、いや、あの場所での出来事が、夢なんかじゃないってこと。
このドーナツは、ミルがくれたものだ。
結局それは、あたしの朝ごはんになった。

なんだか、懐かしいような優しい味。

そして、学校。
古典、情報、そして今。数学なう。

「高搭せんせ〜！　これわかんなーい！！」
あちこちで先生を呼ぶ声が飛び交う。

「はいはい、ちょっと待ってて〜」　順番だから、と笑う。

あたしは、こんなやりとりをした試しがない。
数学は苦手。
いつもテスト前に焦ってなんとかこの2年9組、またの名を普通コース選抜クラスに位置しているのだ。　いままで赤点とってないのが不思議なくらいなレベルだけど、あえて自分から質問したりはしない。　たいていは窓の外を見て1時間を過ごす。

黒板に向かって解説をする先生を見て、ふと、あの哀しげな姿を思い出した。

「玲南〜？　今日の授業もずっと外見てただろ！」

お昼休み。　いつもの第二多目的室にて。

「あ〜、だってわかんなかったし。　先生見てないじゃん。」
思いっきりイヤミをこめて言うあたし。

「やる気のない生徒は見てあげませんよ。」
すました顔え言う先生。

もともとやる気ないですよ、　なんて言いませんよ。

「いいよ、べつに。」　でも、ちょっと寂しいとか思ったり…。

「！？？」　先生のお弁当を見て、あたしは自分の目を疑った。

「ああ、これ？　って、なんでそんな驚いてんの？」
また一口。

「い、いや、、、。な　んでもない、、、っ」　しどろもどろのあたし。

だって、先生の今日のお弁当＝パンの中に…
「あの」ドーナツがあったから…！
数あるドーナツのなかで、偶然？　いや、間違いない。
それは、ミルがくれたドーナツ　そのものだった。

そして、おもしろいものを見たと言わんばかりに、先生は言った。

「…昨日は、また夢を見た？」

"ここ”のルール

「…えっ？」

「だからぁ、最近不思議な夢見る～って玲南言ってたじゃん。」
コンビニのパンに豪快にかぶりつく先生。

「そ、そうだっけ～？」

「俺はな～、夕べライオンに食われたんだよ！　目ぇ覚めた時ちょっとホントに怖ぇー！って思っちゃったしな（笑）」

「…へ～。　はは、食べられてなくてよかったよ、、、。」

…びっくりした。　ここで夢の話来るパターンね（＜＿＞）

本当は、ここで気付くべきだったのかもしれない。
先生…「高搭優紀」が何者かってことに。
あたしは肝心なとこで鈍いんだよね。。。

その日の、日本史の授業のときだった。

「え～、太閤検地は何年ごろに行ったかわかる人。　え～、じゃあ小林。」

「…わかんないです。」

「教科書に載ってるからそこもう一度見て。え～１２５ページ…！。」

ぼうっとノートをとっていたあたしの前を、何かが通り過ぎた。
え、何、、、？
そう思った時、あたしを取り巻くものに気付いた。
…煙。　白い霧のような、そう、”あの場所”から去ったときの煙と一緒だ。
しかも、あたしにしか見えていないらしい。
その証拠に、クラスのみんなは平然と授業している。
状況を理解し始めた時にはすでに、視界は真っ白になっていた。

…ん、　あれ？

気がついたら、あたしは見覚えのある景色、あの建物の中にいた。
木造のログハウスのような室内。
ほんのり甘いような空気。

「帰ってきたんだ…。」

あたしの周りには、まだ白い霧が漂っている。
制服を払おうとして、気付いた。
そういえば、あたしはあの教室で突然消えた。
今頃、みんなが騒いでいるかも！！！　わぁぁ！やば…！

「あ、ララだ！　来てたんだ。　どうしたの、そんな慌てて。」
アイトだ。

「あっ、あのね！？あたし授業の真っ最中に煙が…。いきなりここ来ちゃったし！今頃みんな騒いでるんじゃない！？　アイト、戻り方は！！？」

「ははっ！　ララ、落ちつけよ～（笑）」

こんな状況で落ち着けるわけないでしょっ！

「大丈夫！　俺らのこの時間は現実と同じっちゃあ同じなんだけど、ここに来ている間は、向こうではほんの数秒にすぎない。きっと、どこかで時間自体が歪んでるんだろうな。俺もよくわかんねーけどさ、あっちに戻ったときはそれほど時間は進んでないんだ。あ、でも向こうが夜のときは違うな。なんか夜のほうが時間を消費しやすいらしいな。」

と、とにかく大丈夫ってことだよね、、、？

「あ、ありがと。　アイト。」

「まーまー、ララもそのうち慣れるって。」
明るく笑うアイト。

その時、部屋のあちこちのカーテンがふわぁっと揺れたかと思うと、一瞬の間で白い煙の渦がアイトとあたしの前に現れたかと思うと、手で煙をはらう人影が見えた。

「！　ミル！！！」

「わぁ～ララ！　アイトも！　来てたんだね～。」
あたしはミルの格好を見て驚いた。

だって、すごくきれいな服を着てたから。服というより、ステージ衣装…と言ったほうがいいかもしれない。紺のサテン地のドレスに、シルバーアクセサリー。目元にはキラキラのパールシャドウ。

やっぱり、どこかで見たことある、、、。

だが、15歳のミルにはちょっと大人っぽいような服装にメイク、、、。

この子は、誰だっけ？

「ミル…。　その格好…。」

「あ、あ～！　ごめんね。こんな姿。　着替えてくるねっ！」

慌てて奥に隠れるように消えた。

つづいて、コトリが現れた。

どこかの幼稚園のスモック。　手には黄色い通園帽子。

目には涙をいっぱいためている。

「コトリちゃん、、、？」

「う、うわぁ～ん！！！」　いきなり泣き出した。　どうすればいいかわかんないよ～！

あたしがうろたえていると、アイトがやってきた。

「どーしたのコトリ。　何かあったか？」目線をコトリに合わせ、覗き込むアイト。

「…っ、コト、…っ、ゆうやくんがね、コトのねっ、コトにお砂か

けてね、うわぁん！」
涙をぽろぽろこぼしてアイトに訴える。
「そっかぁ～コト、大変だったなぁ、よしよし、もうだいじょうぶ！　アイト兄ちゃんがついてるからなっ！へーきへーき！」
笑顔でコトリを抱き上げるアイト。
この人は優しいって、一目でわかる。
「あ～ララ、そこのヒヨコの模様のタオル取ってくれる？」
「あ、はいどーぞ！」
「サンキュ！」　ドクロの柄の黒い靴下。ジャラジャラ音のするベルトのジーパンに黒のTシャツ。銀のスタッズが光るパーカ。
一見バンドを組んでそうな格好のアイトが、幼稚園児をだっこしてる画が、なんだかおかしくて笑えた。あたしを見て、アイトとコトリも笑った。
ふと、コトリのピンクのスモックのチューリップ形の名札が目に入った。
「もりた　ことり」　裏面　「森田　琴梨」
…これが、あたしが一番最初に見た、現実の情報だった。
イコール、この世界で見てはいけないもの…。
2時間くらいたった後、シグマが姿を現した。
シグマが来るのを待って、5人でトラペゾイドの街に散歩に繰り出すことにした。

シグマはひどく眠そうで、受け答えもぼんやりしている。
外に出ると、大きく背伸びをしてコトリの手を引いた。

この街をみんなで歩いて、気付いたことがある。

１つ目は、この世界には子供の姿が極端に少ないこと。
そのことをシグマに聞くと、アイトに聞けー、と眠そうに言われた（（＋｜＋））
アイトは、「この世界は、特別だからな。」と、静かに言ったからそれ以上は聞けなかった。

２つ目は、誰も人のことを「さん」づけしたり、本名で呼び合うのを避けていること。
そういえば、あたしも最初からシグマのことも呼び捨てだった。
唯一、例外はユキさんだけらしい。

３つ目は、この世界にお金の制度がないこと。
食べ物や飲み物など、みんなスーパーやコンビニで見たことのあるものばかりだけど、お店らしきところにいる人に言えばいいことになっているのには驚いた。お金どころか、郵便局や市役所などの行政施設そのものが存在しないのだ。

それはつまりこの世界の人たちみんなが、長く”ここ”に留まっていられないということ。
あたしと同じように、現実に生きている人々で、不定期にワープを繰り返しているのだ。

それがなぜなのか、あたしにはわからなかった。
でも、１つだけ確かに言えるのは、この世界の人々はみんな、ここが好きだということ。

そして、何かとてつもなく大きくて暗い闇を抱えて逃げてきた人々だということだ。

「澪の森」と漆黒の少女

あれからもちょくちょく、あたしは”トラペゾイド”に行っていた。最初こそ驚いたものの、ワープを重ねるうちにあの白い煙に包まれる瞬間を心待ちにするようにさえなっていた。なんていうのかな、現実から逃げたくて。非日常的な”トラペゾイド”が、あたしにとっての癒しだった。

「玲南！　聞いてる？」
…えっ？

「だから、玲南の一番の課題は数学だけど、大学の試験は英語が大切だ…ってことなんだけど。」
不満そうにボールペンをカチカチならす先生。

「あ、あーね！　聞いてるよ！英語ね～、教科書英語なら得意なんだけどね。」

「それじゃダメ。　英検2級目指してみ？」

「うーん。　そうだね。。。」

いつになく先生っぽいことを言う。

「ねえ、優ちゃん。」

「先生、だろ。」

「あのね、あたし、先生のこと好きだからね？」
「…告白（笑）？」
「あ、教師としてね？」
「うん、知ってる。　なんでいきなり？」
「それは…。」　あの日みたいな哀しい目をしてほしくないから。
「それは？」
「なんでもないっ！なんとなくだよ！！」　そんなこと言えないよ。
「玲南、もっと肉食いな。」
「うん。食べてるよ。」　…家ではね。
あたしが細いのを見て、彼はいつも言う。
それは、あたしが外で物を食べることができないせい。　あたしは、病気だ。

帰る途中で、また白い煙につつまれた。
最近は2日に1回ペースで”ここ”に来ている。
「ララ！　おかえり～。」
建物に入ると、ミルが出迎えてくれた。
「お！ララじゃ～ん！」　アイトもいる。

「ん。　お帰り。」　無愛想にシグマも言う。

「ただいま！　あれ、コトリちゃんは？」

「あぁ～、さっき森のほうに…ってあれ！？」アイトがうろたえる。

「そういえば遅いね。。どうしよう迷子になってたら！」ミルがとたんに泣きそうな顔つきになる。

シグマが外に出た。　すでに時刻は６：３０。表はとっくに暗闇と化している。

「行くぞ。」シグマが小走りで坂を駆け出した。あたしたちも続く。

「も、もう走れない…っ、むりっ！！」ミルが音を上げたころ（っていっても走った距離は２００ｍくらい）あたしたちは、トラペゾイドの最西端、「澪の森」の入り口にいた。

木の標識が、街灯に照らされて怖い。

「ね、ほんとにこんなとこにコトリちゃんがいるの？」だってあたしでも怖いんだよ？

“現実”に戻れてたらいいんだけどな…」アイトが言う。

「ねぇ！！　これ…。コトリのじゃない…？」小さなお花のピン。

間違いなく、コトリのものだった。

「行こう。」シグマが走り出した。　空気が重い。

ところが、何百メートル捜しても、コトリはいなかった。
「澪の森」というだけあって、湿気が多い。
あたしたち４人が木の葉や枝を踏み折る音だけが、パキパキと異様に響いた。
時間だけが刻々と過ぎる中、あたしたちはいつの間にか方向感覚を失ったらしい。
ざわめく森の中で、完全に迷ってしまった。
いつ自分が現実に戻ってしまうかもしれない。その恐怖もあった。

「どうする、アイト。」シグマが言った。

「どうするって…。捜すしかないだろ。」アイトが頭を抱えた。

ぺたん、と地面に座り込むミル。　あたしも疲れ果てていた。

「なぁ、シグマ。ここの森、広さとか計算で割り出せないか？」アイトがふと、思いついたように言う。正直、勉強など興味ねー。みたいなキャラのアイトの言葉に、３人が顔を上げた。

「やってみる。アイト、お前地理は頭に入ってるよな？」

「まかせとけって！　」

２人は地面に木の枝で何やら書き始めた。

「澪の森はたしか、この世界の最西端の森だよな。縦横に６つの沢があって、東から２．５キロの位置に沢の主流があるはずだ。」いつものおちゃらけキャラのアイトとは思えない。

シグマが何か角度を計算する。
あたしとミルにはさっぱりわからない。
「幸いこの世界は台形だから、計算が楽だ。」記号と数字ばかり。
「この風向きと雲の流れからして、入口からさほど方角は狂ってないみたいだな。」と、アイト。
「よかった。　ひとまず安全なルートに戻ろう。」シグマが立ち上がった。
…その時だった。
パキッっと枯れ枝の音がして、誰かが近づいてくる気配がした。
闇の中、４人は身動きがとれない。
足音は徐々に近づき、やがて止まった。
背後から近づいてきたその人物は、月明かりに照らされ、正体を現した。
黒髪ストレートの前髪ぱっつんヘア。ゴスロリのような格好をしている少女。
手にはコトリがいつも持ち歩いている人形。
この漆黒の少女は、こちらをまっすぐに見据えて言った。
「なかなかの頭脳と行動力をお持ちのようね、時の迷い人のみなさん。でも、あたしが創った世界に”現実”の知識は通用しないわ。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9082x/

---

trapezoid ~時空を架けて~

2011年12月11日01時51分発行